

書評

全所的プロジェクト研究「失われた10年？ 90年代日本をとらえなおす」とその成果刊行物について

橋川 武郎

はじめに

この小稿では、東京大学社会科学研究所が2000年度から2004年度にかけて取り組んだ全所的プロジェクト研究「失われた10年？ 90年代日本をとらえなおす」(The Lost Decade? Re-appraising Contemporary Japan)と、その研究成果をまとめた刊行物である『「失われた10年」を超えて』全2巻(東京大学出版会、2005年12月・2006年2月刊行)の概要を紹介する。筆者は、当時、東京大学社会科学研究所全所的プロジェクト研究運営委員長として、同プロジェクトの進行と成果刊行物の編纂に関与したことを申し添えておく。

I. 全所的プロジェクト研究 「失われた10年？ 90年代日本をとらえなおす」について

東京大学社会科学研究所が2000～04年度に取り組んだ全所的プロジェクト研究「失われた10年？ 90年代日本をとらえなおす」は、1990年代は改革の機会を逃した「喪失の10年」であったとする通説的な見解を批判的に検討しつつ、90年代の日本において、実際には何が生じ、何が生じなかったのかを実証的に解明し、さまざまな点で長期的な構造変化が生じた90年代の歴史的位置づけを与えることをつうじて、21世紀の日本のあり方を考えるための基礎的な知的基盤を提供することをねらいとしたものであった。

このプロジェクト研究は、次のようなテーマを掲げ、カッコ内に記した社会科学研究所のスタッフ(当時)を代表者とする12の研究グループによって構成された。

- 「日本企業と産業組織」(橋川武郎・工藤章)
- 「日本経済と産業組織」(松村敏弘・佐々木弾・中村民雄)
- 「大企業ホワイトカラーの人事管理と業務管理」(中村圭介)
- 「教育と若年労働市場の変容」(石田浩)
- 「グローバリゼーションと福祉国家：生活保障システムの比較総合研究」(大沢真理)
- 「福祉国家と住宅」(佐藤岩夫)
- 「先進国の中の日本政治変化」(樋渡展洋・平島健司)
- 「国際秩序の変容と日本」(樋渡展洋・石田淳)
- 「90年代日本の思想変容」(平石直昭・宇野重規)
- 「開発と市場移行のマネジメント」(中川淳司)
- 「自由化と危機の国際比較」(末廣昭・小森田秋夫)
- 「中国の移行経済体制」(田中信行)

これらのグループ研究の成果は、それぞれ学術書として出版されるとともに、東京大学社会科学研究所が発行する紀要『社会科学研究所』の特集や『東京大学社会科学研究所研究シリーズ(ISS Research Series)』の特別号として発表された。

また、このプロジェクトには、9ヵ国11箇

所の海外研究協力機関と、14カ国50名の海外研究協力者が参加した。2002年11月にウィッテンベルグで行われたドイツ語圏の現代日本社会科学学会（Vereinigung fuer sozialwissenschaftliche Japanforschung）の年次総会、および2003年4月にシェフィールドで行われたイギリス日本研究学会（The British Association for Japanese Studies）の年次総会では、このプロジェクトの成果が中心テーマとして取り上げられ、プロジェクトを構成するグループ研究の代表者が複数名、ゲストスピーカーとして報告を行うとともに、その内容をまとめた論文を現地発行の学術書や学術誌に発表した。また、これらとは別に、プロジェクトに関連する国際コンファレンスを、日本だけでなくドイツ、イギリス、ブラジル、中国、韓国などで開催した。

全所的プロジェクト研究「失われた10年？

90年代日本をとらえなおす」を進めるにあたっては、1990年代の日本において、グローバル化（globalization）が基底的なインパクトをもったという視点を導入した。グローバル化の本質は、市場原理の拡張にある。グローバル化が進行する状況下、1990年代の日本では、それまで市場原理の作用をある程度抑制し、結果として経済の高成長をもたらしてきた様々な社会システムが動揺をきたすことになった。同プロジェクトでは、主要な社会システムである経済システムと政治システムを取り上げ、それらの内部で何が起き、何が起きなかったかを検証した。

経済システムに関しては、生活不安の中心的な原因となっている雇用不安をもたらした企業体制（中小企業を含む）の危機とともに、金融の機能不全と公共部門の非効率性に示されるシステム全体の危機も問題にした。政治システムに関しては、経済停滞下の日本で顕在化した脆弱政権下の戦略的ジレンマ（脆弱政権下では政策改革が妥協的になり、妥協的な政策改革は社会経済状況を改善せずに脆弱政権を再生産するというジレンマ）と、そのジレンマの打開（小泉政権の登場）に光を当てた。

これらの社会システムの危機を克服し再生への道を切り拓くためには、適切な担い手が、問題解決の方策と筋道に関して体系的、自覚的な選択を行い、それを実行しなければならない。ここで注目すべき点は、グローバル化が、問題解決の担い手のあり方にもインパクトを与えたことである。

グローバル化は国民国家の枠組みに影響を及ぼし、国内市場に基盤をおく企業や日本の行政機構などの社会的機能を低下させた。企業や政府による従来型の問題対応には限界が生じ、代って、新登場したNPOやNGOの出演が広がった。生活保障システムの再構築に関して、NPOやNGOによるセーフティネットの編成・機能についての国際的な経験交流が重要な役割をはたすようになったことは、その端的な事例である。

全所的プロジェクト研究「失われた10年？

90年代日本をとらえなおす」では、日本の既存の社会システムに再編を迫り、問題解決の担い手にも変化をもたらしたグローバル化のインパクトに注目した。ただし、ここで銘記しなければならない点は、日本は、グローバル化の一方的な受け手では、決してないことである。日本は、世界有数の貿易黒字国・資本輸出国であり、グローバル化を推進する国際機関の主要なメンバー国でもある。この面では、日本は、欧米先進諸国とともにグローバル化の推進者ともなっている。このプロジェクトは、直接的には日本を対象にして、あるべき選択肢と改革の筋道を明示しようとしたものであったが、そこで得られたインプリケーションは、「あるべきグローバル化」を進めるうえで有用なメッセージとなる可能性が高い。本来、グローバル化に対しては受動的ではなく能動的に対処すべきであり、同プロジェクトの参加者の多くも、このような姿勢を堅持したいと考えている。

II. 『「失われた10年」を超えて』全2巻 (東京大学出版会) について

東京大学社会科学研究所編『「失われた10年」を超えて』全2巻(東京大学出版会, 2005～06年)は, 上記の全所的プロジェクト研究「失われた10年？ 90年代日本をとらえなおす」の成果全体を集大成したものである。同書の研究方法上の特徴としては, 二つの点を指摘することができる。それは, 実証性と論理一貫性である。

「失われた10年」と呼ばれた1990年代以降, 日本社会が直面することになった危機の本質を理解し, その解決策を見出すためには, まず, 実際に何が起き, 何が起きなかったかを見きわめることから出発しなければならない。また, 提示された危機克服の処方箋が適切であったか否かを判定するためには, その内容と実行プロセス, 帰結について, 濃密な観察を行う必要がある。『「失われた10年」を超えて』全2巻は, このような見地に立ち, 実証性に重きをおいて諸問題に接近している。

一方, 『「失われた10年」を超えて』全2巻が論理一貫性を強調したのは, 1990年代以降の日本について否定的な評価が支配的である現在の状況と, 日本の諸システムに対する肯定的な評価に満ち溢れていた1980年代までの状況とが, あまりに対照的だったからである。社会科学に携わる学徒として, このような評価の場当たりの急転換を放置することは許されない。日本の社会システムに関して, 1980年代までと1990年代からとを一貫した論理で説明する視座を提示することは, 日本の社会学者が等しく負うべき重大な責務である。

『「失われた10年」を超えて』全2巻は, 「経済危機の教訓」という副題をもつI巻と, 「小泉改革への時代」という副題をもつII巻とからなる。両巻の章別構成と執筆者は, 以下のとおりである。

[I巻] 経済危機の教訓

- 序章 経済危機の本質(橘川武郎)
- I 危機の実相
 - 1章 経済危機の本質(橘川武郎)
 - 2章 金融危機を生んだ構造(花崎正晴・Yupana Wiwattanakantang・相馬利行)
 - 3章 「産業空洞化」・サービス経済化と中小企業問題(橘川武郎)
- II 改革の地平
 - 4章 規制改革の成果とその課題(小川昭・松村敏弘)
 - 5章 雇用システムの継続と変化(中村圭介)
 - 6章 逆機能に陥った日本型生活保障システム(大沢真理)
- III 国際的文脈の変化
 - 7章 「アジア」化する日本経済(末廣昭)
- 終章 企業の社会的役割とその成果(橘川武郎)

[II巻] 小泉改革への時代

- 序章 政治転回・小泉政権の意味(樋渡展洋)
- I 政府制度的課題
 - 1章 小泉改革の位相(樋渡展洋)
 - 2章 政治的リーダーシップと構造改革(グレゴリー=W.ノーブル, 訳: 杉之原真子)
 - 3章 国家・社会関係(佐藤岩夫)
- II 政策的課題
 - 4章 長期経済停滞下の財政運営と銀行部門再建(樋渡展洋)
 - 5章 政治的リーダーシップと財政投融资改革(グレゴリー=W.ノーブル, 訳: 豊福実紀)
 - 6章 三位一体改革による中央地方関係の変容(北村亘)
 - 7章 改革の中の逸脱—労働政策—(中村圭介)
 - 8章 空洞化する社会的セーフティネット(大沢真理)

書 評

Ⅲ 国際的課題

9章 対外経済政策（中川淳司）

10章 冷戦後の安全保障戦略（樋渡由美）

I巻は「失われた10年」の危機的様相が集中的に現出した経済・企業システムについて検討しており、II巻は政治システムを主たる分析対象として制度変更と変化の担い手に光を当てている。I巻の序章は2巻シリーズ全体の序章、II巻の序章は2巻シリーズ全体の終章に、それぞれ相当するものである。また、II巻の序章は、

I巻とII巻の関連についても説明を加えている。

おわりに

本誌には、上記の『「失われた10年」を超えて』II巻に対する加藤淳子氏の書評が掲載されている。お忙しいにもかかわらず書評を寄せられた加藤氏に感謝の意を表するとともに、『「失われた10年」を超えて』全2巻がさらに多くの読者の目にふれることを期待したい。